

『法学新報』第一〇四号 明治三十二年十一月二十日

○東京法学院討論会の組織

東京法学院に於ては頃者生徒中重なる人々相謀りて討論会を組織し將さに鴻に大々の議論を試みんと計画しつゝ、あり多分は来月第二日曜の頃を以て其第一会を開くの運びに至るへしと云ふ余輩は我か東京法学院の爲めに之を祝し且つは邦家の爲めに之を賀す語を創立委員に寄す諸君希くは其基礎を堅ふし其方法を巧みにし余輩をして朝たに生れて夕へに死するの嘆あらしむるなからんことを今創立趣意書を得たれば左に掲ぐ若し夫れ会の規則書に至ては追て本社に通知ある筈なり

法律学の研鑽は、多く読み、多く聞き、多く論ずるにあるのみ、多く論ずるは我か気を励まし我か弁を錬り我か説を貫く所以なり多く聞くは新に就き、奇を知り、隠を發し、微を悟る所以なり、多く読むは想を養ひ、理を析き、他日聚めて大成するの地を爲す所以なり、読んで而して聞かすんは其弊や則ち陳、聞て而して論せずんは、其害や則ち濫、皆な甚た喜ふ可らざるなり、夫れ我か東京法学院は、少壮法律家の淵藪なり、固より多読多聞の士に富めり、然るも、講堂の裡、爐火の辺、人をして時に寂々寥々の感あらしむるものあるは何そや、想ふに或は多く論ずるの士に乏しきにはあらざるなきか、我れ等院の爲めに窃か

に、之、を、惜、む、乃、ち、茲、に、本、会、を、組、織、し、て、以、て、大、に、天、下、に、呼、号、す、
あ、ら、ん、と、欲、す、院、内、同、感、の、士、請、ふ、決、然、と、し、て、起、ち、翕、然、と、し、て、
之、に、応、せ、よ、